



イラスト・すみのけいし

今回のゲストは黒田一樹さん。黒田さんは慶應義塾大学文学部（美学専攻）出身の経営コンサルタントですが、今回の対談内容は、そんなこととは関係なく、関西の私鉄についてであります。

黒田さんは、日本中の鉄道に乗りたおすだけでなく、世界中の地下鉄にすべて乗るといふ野望を達成しつつある、行動派の「鉄道乗者」です。その該博な知識には想像を絶するものがあるのですが、そのごく一部を惜しげもなく開陳された『すごいぞ！ 私鉄王国・関西（140B）』をこの五月に出版しておいでです。

その本を読んですぐに、担当編集者である大迫力君に、「こんな本売れへんやろお」とメールを送った記憶があります。地元である関西の鉄道ファンが全員買ったところで、たいした数にはなるまい、と思ったからです。しかし、幸いなことにその予想は大きくはずれ、地元だけでなく日本中の鉄道ファンの共感を呼び、えらく売れたのであります。

今回の対談には、その大迫力君も同席してくれました。大迫力は「だいはくりよく」ではなくて、「おさこちから」と読みます。ちなみにペンネームではなくて本名です。どうでもええのですが、念のため。

実は、黒田さんは末期の大腸がんを宣告されており、鋭意加療中であります。すこしお体を案じていたのですが、何度目かの入院を終えられたところで、大阪までおいでいただきました。

対談場所は、かつて阪急電車・梅田駅のコンコースを飾っていたシャンデリア四基と建築の大家・伊東忠太がデザインしたガラスモザイク壁画が移築されたゴージャス感あふれるレストラン。対談にふさわしい場所ではありますが、いきなり、黒田さんの『望星』にまつわる思い出から始まりました。

運命のイヤガラセ系・関西私鉄対談

黒田 二〇一四年の六月に、列車を味わい、楽しみ尽くす方法を紹介した『乗らずに死ねるか』（創元社）という本を出したんですが、刊行とまったく同じタイミングで「乗らずに死ねるか！」なる特集を組んだ雑誌がありましたね。それが、まさかの霊柩車特集だった。「それ、『死なずに乗れるか！』じゃないか!？」と思ったのですが、その雑誌というのが、ほかならぬ『望星』だったんです。なので、私にとっては『望星』



まさかタイトルや発売時期がかぶるとは……

仲野 いやいや、『すごいぞ！ 私鉄王国・関西』には、そうとうマニアックなことが書いてあったと思うんですけど。黒田 マニアであることとマニアックであることは、別かなと思っっています。

といえは霊柩車なんですけど、そんな雑誌にのらしねの著者が出ることになるとは、まさに運命のイタズラというか……。

仲野 運命のイヤガラセというか……。今日は、そんな運命ものともせず、大阪の電車、なかでも私鉄についていろいろかがつていきたいと思います。黒田さんは東京にお住まいなんですよね？

黒田 そうなんですけど、たまたま関西とご縁があつて。特に電車マニアというわけでもないんですけど。

くろだ・いつき●1972年北海道生まれ。中小企業診断士、1級販売士などの本業を持ちながら、さまざまな電車に乗り、一乗客としてありのままの鉄道を味わい楽しみ尽くす「鉄道乗者」でもある。

なかの・とおる●1957年大阪府生まれ。専門は生命機能研究など。著書に『エビジェネティクス 新しい生命像をえがく』（岩波新書）など。